

**建築家;田上義也/1899-1991に関する建築調査研究
(I)-北海道・阿寒における阿寒小学校・鶴翔校舎:
田上建築**

著者	木下 泰男
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	4
ページ	25-36
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001064/

研究論文

建築家；田上義也/1899-1991に関する建築調査研究(Ⅰ)

－北海道・阿寒における阿寒小学校・鶴翔校舎：田上建築－

木下 泰男

研究論文

建築家；田上義也／1899-1991に関する建築調査研究(Ⅰ)

－北海道・阿寒における阿寒小学校・鶴翔校舎：田上建築－

木下 泰男

北翔大学北方圏学術情報センター

抄 録

本論考は、田上義也（1899-1991）が設計した地域性の強くあらわされた建築の創造性に関する研究の成果である。研究対象は田上が設計し、北海道の道東・阿寒に建築された小学校建築／（1965）で、現在、既に老朽化に伴い2000年に解体されてしまっている。この建築における建築家・田上義也の建築創作造形に焦点をあて、彼の略歴と米国建築家・F.L.ライトとの系譜、そして彼の作品を一覧に整理し、建築が地域に根差した象徴的な創作の在り方と意義を論述している。

キーワード：阿寒小学校；鶴翔校舎，フランク・ロイド・ライト，エゾ・ライト，田上義也，阿寒湖畔小学校：マリモ校舎。

Ⅰ. 背景と目的

1. はじめに

北海道の建築家の草分け的存在である建築家・田上義（吉）也／1899-1991年は、帝国ホテル／1919年の設計に携わった米国人建築家・F.L.ライト／Frank Lloyd Wright；1867-1959の下で、若干20歳ながら建築家としてのプロフェッションを学んでいる（Fig.1）（Fig.2）。



Fig.1) 田上義也／30代, (1899-1991)

田上は、帝国ホテルの完成披露の際に関東大震災（1923年）にみまわれ、決心し、下宿先で友人であった

有島武郎の実家・有島農場を頼って北海道に向かう。その列車の中で、「アイヌ民族の父」といわれるイギリス人宣教師のJ.バッチラー^{*註1)}／Jhon Batchelor：1854-1944神父と運命的な出会いとなったのである（Fig.3）。

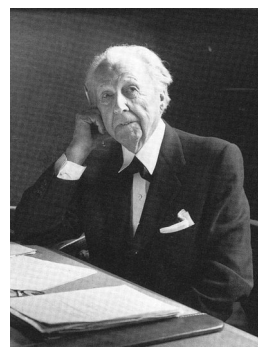


Fig.2) 米国人建築家・F.L.Wright, (1867-1959) ／（左）

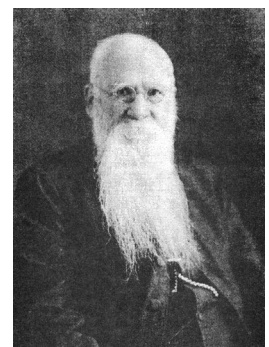


Fig.3) 英国人宣教師・J.Batchelor (1854-1944) ／（右）

巨匠建築家・ライトの系譜上に位置する田上は、北海道の道東に位置する阿寒に2つの小学校を設計した。その地域は、阿寒国立公園に指定され、マリモと耕作地に飛来する丹頂鶴の2つが特別天然記念物に指定されている。初めに設計したのは、原始林に囲まれた阿寒湖畔のアイヌ民族集落の中心からほど近い、小高い丘に建つ村立阿寒湖畔小学校校舎「マリモ校舎」（1956年）だ（Fig.4）。2つ目の設計は、10年後に町制がしかれ、丹

頂鶴が飛来する地域集落に町立阿寒小学校校舎「鶴翔校舎*註2)」(1965年)を設計した(Fig.5)。しかし、現在、この建築作品2題とも既に非現存となってしまっている。国立公園内に位置し、神秘的湖に隣接する温泉地と山々に囲まれたアイヌ民族集落を内包する地域の児童教育を担う村の教育長と地域住民は、子どもたちへの教育に対する熱意があった。この辺境の地での建築に携わった田上は、建築家の設計思想の思いと相まって村立阿寒湖畔小学校校舎「マリモ校舎」が実現した。



Fig.4) 阿寒湖畔小学校／マリモ校舎, 1956.*

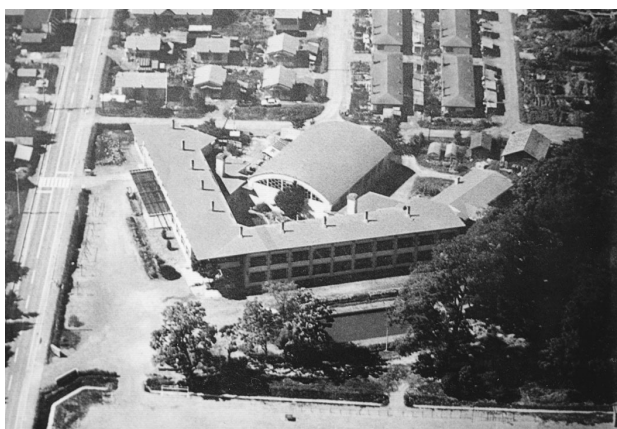


Fig.5) 阿寒小学校／鶴翔校舎, 1965.

続く、町立阿寒小学校校舎は、町制が施行され村から町への変革と新学制に伴い、近代化された空間構成と洗練された外観を持つ。釧根地域管内に魁て、教育の近代化の一步としてこの学校建築を道東地域のモデル校舎とした意義は小さくなく、建築家・田上に阿寒の象徴を再び設計依頼する。

F.L.ライトがオーガニック(有機的)建築*註3)として自然と一体化する建築を創造した。田上は、有機的建築を地域固有の自然環境遺産の生命を、地域の象徴とし、自身の建築の概念形成にまで昇華させていると考えられる。その点において町のランドマークとして興味深

い有機的建築2題を阿寒地域において実現させた。

アイヌ民族のユーカラ(口承叙事詩)にもみられるマリモの地域性を意識した「マリモ校舎」(1956年)と近代様式を用いながら有機的概念を融合させている建築造形思想としての近代建築校舎の阿寒小学校校舎;「鶴翔校舎」(1965年)、これら2題の学校建築は1990年代に入り、校舎の老朽化の進行や耐震性の不安、規模対応の不具合に直面し問題が表面化した。

行政は、危険校舎認定を根拠に校舎解体新築移転を検討し始める。

地域にとっての記念碑的建築の保存意義と持続可能な利用活用の視点から、空間保存と地域空間としての提案が地域再生の運動に連動し、校舎を活かした空間の再生提案が1998年に全国設計競技*註4)で試みられてもいた。

2. 背景

阿寒での学校教育は開拓期における明治初期、村内における学校教育は1901年の舌幸簡易教育所(4年)の開設に始まる。

戦後の混乱が一段落すると、行政の目は一層教育に向けられた。食糧不足による児童の栄養不良の改善、そして木造校舎の老朽化、押し詰め状態にあった環境改善など増築は行政の急務であった。

1948年GHQ(連合国軍総司令部)の命令により生徒の栄養の改善、偏食の矯正など生活教育の意味から学校給食の実施が求められた。村内では2番目に阿寒小学校が指定校とされ、1951年以降より1955年代にかけて児童生徒の体位向上対策として、屋内体育館が設置され、僻地校においても社会教育施設としての体育館とグラウンドの用に供した。1965年以降になると、耐久年限と防火上の見地から校舎建築は木造から鉄筋コンクリート造とする阿寒小学校の全面改築(1965年)が町内第一号となった(*既に田上の「マリモ校舎」;鉄筋コンクリートブロック造1955年がある)。

3. 研究の目的

この論考では、校舎設計に携わった建築家・田上の略歴と阿寒小学校校舎の解体に至る動向そして、道東管内に魁た学校建設の経緯そして、村制から町制への時代の発展とともに小学校舎が町に対して果たした地域貢献の意義を整理し明らかにすることを目的とする。

さらに、田上建築作品の中でも、道東地域の特筆に値する阿寒小学校校舎建築の空間創造にみるランドマークとしての地域創成の姿を探り、その造形創造に言及する。

加えて、老朽化問題に対する田上建築の既存空間をリノベーションし、地域に育まれた建築空間の意義を再生

空間の形として継承する提案の試みを、地域の建築遺産としての有効活用に言及した保存活動と建築保存の在り方の持続可能な再生提案事例を示しておく。

Ⅱ．田上と北海道

2-1. 田上義也とF.L.ライトとJ.パチェラー

北海道へ渡って33年後、1956年の「マリモ校舎」と「鶴翔校舎」の阿寒小学校／1965年は、当時、田上が辺境の地の設計を引き受ける。それは、北海道庁の本呂子敏彦・道教育長による仲介で村の教育委員会の意向受けての経緯と、合わせてアイヌ民族の集落地域であることの背景があった。さらに、湖と原始林に囲まれた国立公園内の「マリモ」特別天然記念物指定／1952年など自然環境の存在によって田上の創作意欲が駆り立てられたのかもしれない。そして、1965年、再び「タンチョウの里」・阿寒での建築を引き受ける背景が読みとれる。田上は帝国ホテル／1919-23年の設計に携わったアメリカ人建築家・F.L.ライトの下、若干20歳で遠藤新やA.レーモンドらと出会い建築家としてのプロフェッションを学ぶ。

そして、帝国ホテルの完成披露の際、関東大震災／1923年に見舞われ、北海道へ向かう。その列車の中でアイヌ民族への献身的教育に努めたイギリス人宣教師・J.パチェラー神父と出会ったのである。以降、北海道での田上の活動に影響を与えていく。

J.パチェラーは、道東・釧路地方へは1891年に釧路の私設春採尋常小学校（：アイヌ子弟のための学校）の教鞭に出向いている。阿寒湖畔アイヌの長老・山本多助（故人）は1919年永久保の小学校に入学し、J.パチェラーより永久保を通して教えを受けている。

田上は北海道に渡ってすぐに1924年辺境の地、根釧原野から国後島を旅している。道東に関心を示す二人がいた。

その32年後、阿寒の地に導かれるかのように田上は「マリモ校舎」設計をする。

建設当時、国立公園内敷地を所有する前田一步園^{*註5)}が建設用地を提供するにあたって立木伐採の許可について自然保護を意識するという使命に貫かれたなかでの建設がすすめられた。

また、田上は阿寒湖畔の地域自然を意識し、F.L.ライトの「有機的建築」思想を田上の理解に立って強く校舎建築の設計に力を注いだと伺われる「マリモ校舎」。

再び、10年後の1965年に阿寒小学校校舎「鶴翔校舎」設計にマリモや丹頂鶴のモチーフを引用した地域性の象徴を連携する形で引き継がれた構想が伺えるのである。

田上は、19歳で帝国ホテルの現場事務所に勤務し始

め、建築家・F.L.ライトと出会い、そのもとで協働する遠藤新や土浦亀城、A.レーモンドなどアーキテクチャル・フェローに出会って建築を学ぶ貴重な時期を経験している。

自身でもバイオリンを弾くことから札幌交響楽団の前身の設立にもかかわっていたり、作品展開催など文化活動を精力的にこなしていることが解る。1951年には事務所再開（改称）から設計活動に再び意欲を示している（表-1）。

表-1. 一田上義也年譜一<1899-1991>

1899（明治32）年／5月5日栃木県那須野原生れ、本名吉也。
1915（大正4）年／早稲田工手学校夜間科入学。
1916（大正5）年／早稲田工手学校夜間科卒業。 通信省大臣官房經理課常務勤務。
*（F.L.ライト帝国ホテル設計正式決定。来日し、別館の設計をする。）
1918（大正7）年／通信省辞し、帝国ホテル現場事務。
1923（大正12）年／帝国ホテル落成記念・関東大震災に見舞われ北海道へ渡る。その車中J.パチェラー神父と出会う。*（関東大震災；帝都復興院）
1924（大正13）年／道北・道東・国後島遍歴。北光トリオ結成・演奏会。パチェラー学園設計。
1925（大正14）年／田上義也建築作品展覧会（札幌時計台）。田上義也建築制作アトリエ開設。
1926（大正15）年／自邸・アトリエ（札幌）設計。
1927（昭和2）年／小熊邸（札幌）・坂牛邸／坂邸（小樽）・日本基督教札幌北1条教会（札幌）設計。
1928（昭和3）年／第2回田上義也建築作品展覧会（札幌丸井記念館）。
1929（昭和4）年／外山卯三郎邸（東京）設計。
1930（昭和5）年／第3回田上義也建築作品展覧会（札幌丸井記念館・他）。<雪国的造形意図>; 安部邸（札幌）・城下邸（札幌）設計。
1931（昭和6）年／『田上義也建築画集』出版。太秦邸（札幌）・カフェ三条（札幌）設計。
1932（昭和7）年／近水ホテル（十勝）設計。
1933（昭和8）年／千秋庵帯広支店（帯広）・十勝川温泉ホテル（音更）設計。
1936（昭和11）年／網走観光ホテル（網走）・網走北見郷土館（現博物館／網走）設計。
1937（昭和12）年／石狩海浜ホテル（石狩）・北ノ王

1938 (昭和13) 年	鉾山施設群 (生田原) 設計。 札幌交響楽団設立・指揮。
1941 (昭和16) 年	太平洋戦争始まり, 建築活動休息 状態が続く。
1951 (昭和26) 年	田上建築制作所 (改称) 再開。
1956 (昭和31) 年	阿寒湖畔小学校; マリモ校舎 (阿 寒) 設計。
1959 (昭和34) 年	遠軽家庭学校 (遠軽) 設計。 * (F.L. ライト 4 月 9 日逝去。)
1961 (昭和36)	『北海道の建築』新聞連載。 網走博物館 (網走) 設計。
1962 (昭和37)	支笏湖ユースホテル (洞爺) 設計。
1963 (昭和38)	『雪と炎フロンティアの道』講演。
1964 (昭和39)	『田上義也建築作品抄輯 (住宅編)』 出版。道銀ビル (札幌) 設計。
1965 (昭和40) 年	阿寒小学校; 鶴翔校舎 (阿寒) 設 計。
1966 (昭和41)	『田上義也建築作品抄輯 (公共編)』 出版。日本専売公社網走出張所 (網走) 設計。
1967 (昭和42)	『生き続ける帝国ホテル』寄稿 (新 建築誌)。光塩学園女子短期大学 (札幌) 設計。
1970 (昭和45)	『北の文化と人脈』講演。 ライオンズユースホステル (札幌) 設計。
1971 (昭和46)	『北方圏のユースホステル研究と作 品』。勲 4 等瑞宝章。アメリカ渡航。
1972 (昭和47)	『海外ネットワーク; デンマーク紀 行』発表。函館友の会会館 (函館) 設計。
1973 (昭和48)	『北のユートピア論』講演。
1974 (昭和49)	北海道青年会館 (札幌) 設計。 札幌市教育文化会館 (札幌) 設計。
1977 (昭和52)	人形劇場こぐま座 (札幌) 設計。
1978 (昭和53)	札幌市芸術文化功労賞。
1979 (昭和54)	北海道開発功労賞。
1980 (昭和55)	札幌市彫刻美術館 (札幌) 設計。 札幌市婦人文化センター (札幌) 設計。
1983 (昭和58)	北海道新聞社会文化賞。 勤労者総合福祉センター (稚内) 設計。
1987 (昭和62)	『田上義也ドローイング展』(札幌 芸術の森), 田上義也ドローイング展実行委員会。
1991 (平成 3) 年	8 月17日: 田上義也札幌にて逝 去。

Ⅲ. 田上の戦後の道東建築作品

3-1. 田上義也と戦後の道東建築一覧

戦後の田上作品群を見ると, 事務所を再開して間もなく, 阿寒町の「マリモ校舎」と「鶴翔校舎」は1955年か

ら1965年の戦後比較的早い時期に道東において先駆けて
いる。1975年頃までは道東での作品が集中し, 辺境の地
に関心を示していたように感じられる (別表-1)。

自治体としては阿寒町や標津町に作品が集中して地域
づくりへの貢献が目に残る。特に, 阿寒町での建築作
品は田上作品の中でも際立った建築造形創造を見せてい
る。計画案の象徴的デザインが実施設計ではよりそぎ落
とされ, その作品に対する意欲の表れがスリムなデザイ
ン造形に昇華されたと考えられる。「事務所再開」に加
えて「辺境の自然」に対峙しての建築の可能性に挑もう
とするモチベーションが田上の創作意欲に表れているの
ではないだろうか。

Ⅳ. 町立阿寒小学校校舎: 鶴翔校舎建築

4-1. 地域としての象徴 (阿寒と自然; 国立公園と 天然記念物)

田上は, 建築のイメージを国の特別天然記念物に着目
した。そのことが, 他の田上建築とは一線を画した象徴
的建築に昇華させる創造さで卓越し抜きに出ていると考
えられる。過酷な辺境の地, 道東阿寒のイメージが田上
の道東の印象を転換する要因として, 特別天然記念物に
「マリモ」と「丹頂鶴」が指定 (1952年) され, 国立公
園化 (1964年) に伴ない, カルデラ湖と阿寒連山を擁し
た原始林の貴重な自然景観が次いで指定された。指定さ
れたことは, かつて, 道東・国後への探訪を考えると,
田上の新たなイメージに強く印象付けられた。

この事が, 特別天然記念物の象徴的建築造形化にとど
まらない地方にありながら, 崇高な意識と取り組みが建
築界への田上建築としての発信を秘めていたのではない
だろうか。

4-2. 敷地の立地について (街発祥の地とまりも国 道・240号線)

阿寒小学校は, 国道240号線 (まりも国道) 沿いにあ



Fig. 6) 鶴翔校舎とまりも国道, (阿寒小学校八十年譜)

り、道東の玄関・釧路から奥座敷・阿寒湖畔へ向かう最初の街の公共建築として街の象徴でもあった。阿寒には「丹頂鶴」の給仕場として丹頂鶴の絶滅寸前を脱した給仕(山崎農園)の果たした役割が今も尚継承されている。

舌幸尋常小学校(旧名)は、明治・大正の入植時から下幸村の行政の中心にあり、主要施設が集中していた地域の一角に歴史を刻んでいる。現在の行政の中心は、北西方向の位置(写真上方)へ発展移動し、新市街地が形成されている(Fig. 6)。

4-3. 配置計画と各階構成(鶴翔校舎の建築造形表現と内外部の空間) ; 村井建設釧路施工



Fig. 7) 阿寒小学校：鶴翔校舎竣工, 1965,

配置計画として、校舎輪郭の矢印型造形の軸線上にマリモ国道との交点に合致し、教室群がタンチョウの「V字」飛翔群のように配置され、北側に中庭を囲んでプロムナード廊下が回遊し、後方軸線上に体育館が控え、校舎全体のゾーニングが明解化されている。興味深いのは、この造形は周辺の林を取り巻く四角形の回廊の一角であると考えた将来の可能性を秘めていると考えられる点である。鉄筋コンクリート2階建て延床面積2,750㎡(Fig. 7)。矢印形の片廊下型教室群に中庭と体育館を北

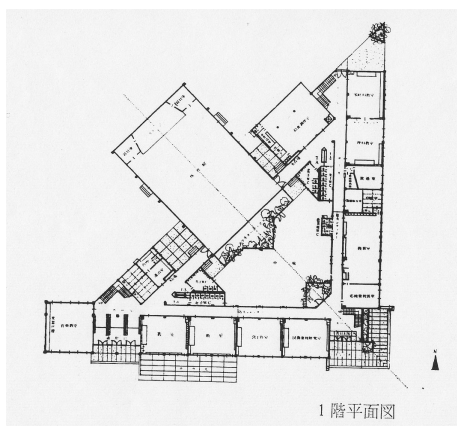


Fig. 8-1) 阿寒小学校校舎1階平面図, 1965,

側に配し、回遊できるプロムナード廊下に沿って水飲み場・便所で両方から屋内体育館をつないでいる(Fig. 8)。

各階計画として1階には、尖塔部(南)に主要玄関・玄関ホール、西側棟に階段型の音楽教室、児童玄関・下駄箱をはさんで教室(低学年)+テラス、東側棟に職員室・便所・宿直室・保健室・理科器具室・放送室・湯沸室・便所・集合煙筒・化粧室・水飲み場・給食調理室・給湯室・体育館等。

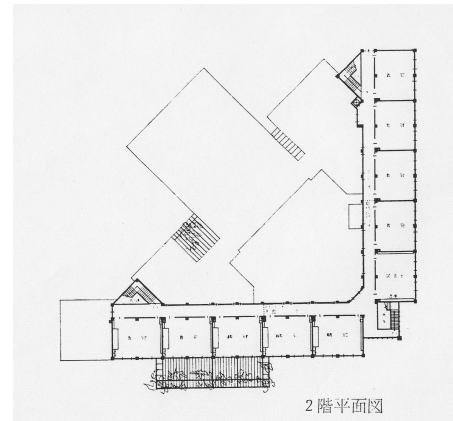


Fig. 8-2) 阿寒小学校校舎・2階平面図, 1965,

そして、2階には主玄関と児童玄関から階段室(Fig. 9)・給食用ダムウエーター・中庭に沿って片廊下型教室群(西側棟に中学年、東側棟に高学年)・図書室等が設計されている。

建物の構成として、低学年棟と高学年棟に工期を2期に分けている。部分構成で興味深いのはエントランスのアルコーブにより、入り隅構成を実現させ、帝国ホテルにも用いられた大谷石を大胆に張られたファサードの設計をしている。このことから児童のみならず地域外からの訪問者の受け入れの意識が伺える校舎設計だったのでないだろうか。



Fig. 9) 回遊プロムナードの一部としての階段室・*

体育館は、両ハイサイド・ライトから採光し、ボールド屋根の体育館と教室群配置による校舎全体が矢印型に構成されている。

体育館暖房として珍しかったプロパンガス暖房が取り入れられ、採光の配慮がなされたプロムナード回遊廊下に接続されている。

そして、全体の造形構成について、南東正面からは水平翼の効いた教室群が両サイドに広がる赤色屋根面の水平翼を抑制させ、中央交点に、明るいガラス構成の主玄関を取り、入り隅の形で人々を迎い入れる。

一方、主玄関とは反対にある体育館側（背面）からは一転して、ランダムな互い違いの片流れ屋根がリズムミカルに構成されている（Fig.10）。また、東側の教室群端部は児童数の増加対応を考慮し、教室の増築を妻側へ導く可能性の「梁」剥き出しの痕跡を呈している。



Fig.10) 北側のランダムな屋根構成・体育館・給食室*

田上の設計意図は、町制施行を受けて街の発展を象徴して、地域の”丹頂鶴”をモチーフとし、「鶴翔校舎」造形に恩師建築家・F.L.ライトの「有機的建築」を意識した設計思想や阿寒湖畔での「マリモ校舎」の実践を連動させ、雄大な自然の印象を実現したと考えられる。田上のスタイルが地域主義の意義を強く垣間見せた象徴的作品と言えないだろうか。この矢印型校舎の軸線は前面道路とまりも国道との交差点に一致し、視点は国道から鶴翔校舎正面を臨む意識が強く伺われる。

小鳥の村を配する自然林との校舎配置は1968年には北海道の愛鳥モデル校として指定を受け、街にとって都市を意識した空間づくりとランドマークとしての小学校建築が地域に貢献することになった。

4-4. 設計手法について（バチェラー学園の建築との相似性）

当時の学校長である田中敏夫氏に校舎建築のお話を聞く機会を得た。田上の平面プランが現行のものとはY字型の平面プランの二つがあったことを鮮明に記憶されて

いた。

小学校校舎デザインの手法を田上建築の過去の作品の中にY字形案（用途不同）を探し、その建築の中に萌芽を探ろうとしたが、事例なく、用途で探るとL字形の平面校舎建築が原型的な田上の象徴が見い出せるのではないかと考えた。

現行の平面プランにY字形の痕跡（L字型＝バチェラー学園）の特徴が組み込まれているのではないかと考え、手掛かりを探ると、Y字形平面案のL字形部分の象徴的エントランス部分が現在の案に応用・融合化され、まとめ上げられた興味深い考察が見えてきた。

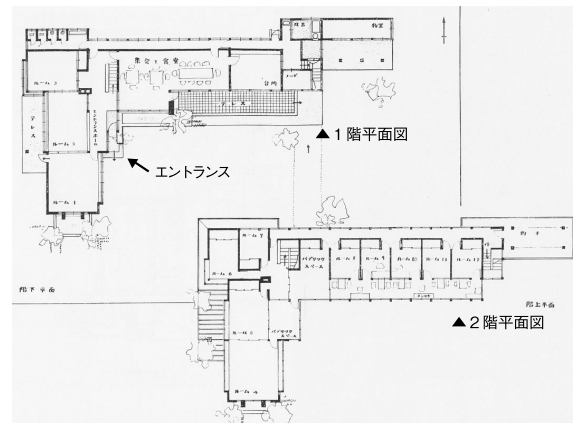


Fig.11) バチェラー学園平面図,札幌,1924（田上建築）

田上は、1924年に札幌でバチェラー学園校舎をL字形で設計している（Fig.11）。エントランス（正面玄関）が、バチェラー学園では、中央交点で入り隅の構成をとっている。「鶴翔校舎」の現行平面では、全く逆になり、頂点は出隅になってしまい、別案のY字型の中央エントラスの実現に向かないのである。

敷地の関係のコンパクトさと回遊形式から現行平面を進めたと考えられるが、バチェラー学園のエントランス（Fig.13）をおそらく反映していると思われることから、Y字型案を矢印型の現行案に応用するためには現行平面プランにみる頂点の出隅部分をセットバックさせることで、アルコーブ的入り隅をつくり、そこに、出隅部を再構成し、バチェラー学園のL字型平面プランの融合化から、現行平面への応用がなされたのではないかと考えられる。

この解決方法は現行エントランス計画を強調する高い両サイドの壁面に大谷石が張られ、キャンチレバーの底によるダイナミックなファサード空間を生み出している。

V. 鶴翔校舎とマリモ校舎

5-1. 建築的特徴（ふたつの有機的表現の田上建築）

「鶴翔校舎」と「マリモ校舎」の共通項を抜き出してみる；①素朴な自然モチーフ：阿寒の“原始的な自然の生命力生物モチーフ”を造形建築化している。特別天然記念物の指定を受け、阿寒では丹頂鶴の飛翔を校舎の教室群に投影させ、湖畔ではマリモの球形を円形体育館屋根ドームにイメージさせ、地域集落の個性を存分に田上は表徴させたのではないかと。②未完成（増築痕跡）＝成長する建築：「鶴翔校舎」は、東側教室群に梁材むき出しの増築の可能性を残している。

実際に「マリモ校舎」増築（2回）では、円形体育館を囲む教室群を東側に増やしている。

田上が地域で校舎の活用に対応する可能性を増殖させる方法で“成長する建築”を実践していた。③建築的造形手法の特色：二つの建築とも興味深いのは、ファサード側と背面側に異なった対比的表情を持ち合わせているという点である。

つまり、建築家としての意匠に対する姿勢が対比的な造形として表徴されている。④地域貢献意識：「鶴翔校舎」は、街全体のランドマークとしての国道からのアプローチが使命であるとともに、歴史的阿寒のかつての中心地としての遺構の意義が背景にあったのではないだろうか。一方、「マリモ校舎」は、阿寒湖畔の中心街にありながら森に囲まれて地域住民にのみ開かれ、ひっそりと隠れた、あたかも“鎮守の森”や“チャシ^{*註6}”空間意識のような卓越した学校立地環境計画に田上の配慮が息づいているのである（Fig. 12）。

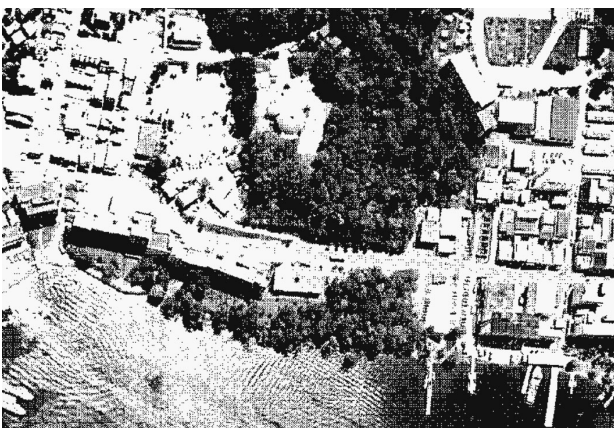


Fig. 12) 校舎空撮、森に囲まれるマリモ校舎、1997、

⑤空間構成の共通性：円による放射型と三角ライトウエル型による単純幾何構成であり、一見異なって見えるが、体育館を囲む教室群を南側に配置している共通性が

解る。しかしその違いは、「マリモ校舎」は集中的で円弧曲線分割構成であるのに対し、「鶴翔校舎」は中庭を中間領域とした回遊式の片廊下開放型で直線的構成によった概念が理解できる。⑥緑の森と校舎建築の融合：田上の阿寒での学校建築には、二つとも森が近接しているのである。おそらく、子供の学校生活にとっては、一番の自然教育が込められていたのではないかと。「鶴翔校舎」では小鳥の村とチョロッペ小川であり、「マリモ校舎」では、国立公園内の原始林である。

5-2. 村立阿寒湖畔小学校「マリモ校舎」

；北見五十嵐建設施工

校舎建築概要は敷地面積：17,097㎡、延床面積：951㎡、建築面積：576㎡、構造：鉄筋コンクリート一部補強コンクリートブロック造・鉄骨造、屋根：ダイヤモンドトラス半球形亜鉛引き鉄板葺き、二階建て円形校舎（Fig. 13）。耐震・耐火の時代に先駆けた試みには意義があると田上自身が述べている。

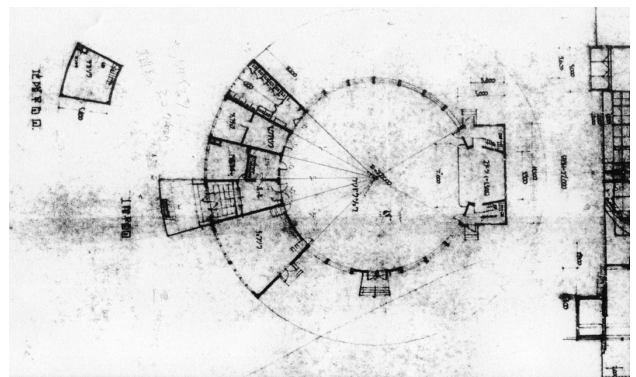


Fig. 13) 1階平面図、丸体育館・扇形教室、1956、

敷地は湖畔市街の温泉観光地の中央に位置し、校舎規模は比較的小さく扇形の教室群とメイン玄関を南側に、円形体育館を北側とし敷地北側奥に立地させる（Fig. 14）。

周辺環境は樹木に囲まれ、西にアイヌ集落があり、その敷地の地形はチャシに似た小さな丘陵地に校舎を配置し、高低差の下にグラウンドが配置されている。

丘陵地周辺は緑豊かな雑木林の緑がスクリーンとなって温泉街からの視界など遮断する形で風雪からも守られ、自然に満ちた地形を利用する立地を呈していることに驚かされる。

さらに、マリモ校舎の造形は地域の隠れたランドマークとしての誰にでも理解されやすく、地域の住民は目印代わりとして親しみを込めて『マリモ校舎』と口にする。

田上にとって「マリモ校舎」での経験と創造が、更なる創作意欲をもって「鶴翔校舎」へと進化した建築に結

びついていると考えられる。その経験と創造とが鶴翔校舎建築造形の田上の有機的建築の卓越した展開に伺える。

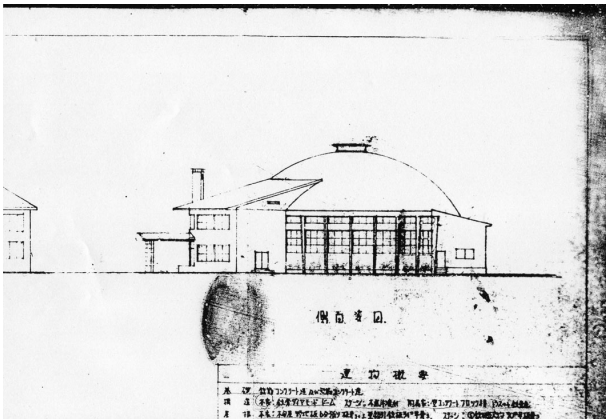


Fig. 14) 東側立面図, 緑藻形綠色ドーム屋根1956,

Ⅵ. 建築再生と地域再生の可能性

6-1. 再生のための試案

集落の阿寒小学校「鶴翔校舎」を地域再生に結びつけたその提案^{*註2)}の在り方が鶴翔校舎のリノベーションとしての再生保存活動に寄せる人たちの気運を後押しした事例がある。

また、1998年当時、既に行政には再生を実行する体力は持ち合わせなく、(*後に釧路市との市町合併協議に向かうことになる) 地域再生に結びつけようとする鶴翔校舎再生気運の住民意識と行政との協調行動には至らず、2000年に惜しまれつつ、ついに、建設から35年を経て危険校舎認定に伴う解体を迎えることになった。解体され、地域生活と一体化してきた校舎の歴史とその継続性の空間は失われ、いまや形の無くなった「鶴翔校舎」の面影は空白空間だけが存在している。「鶴翔校舎」の



Fig. 15) 奈良 TOTO トリエンナーレ校舎再生提案, 1998*

危険校舎認定(文部省基準)から町は別の土地利用計画を模索し進めていた。当時、地域の建築空間の再生提案(Fig. 15)において、阿寒のかつての中心市街地を意識し、同じ土地に恒久的な記憶空間が提案された。それは、建築家・F.L. ライトの系譜を持った田上の建築畏敬を失わない為であり、当時の教育関係者と町民の高揚した思いや校舎変遷の遺構保存活用が基底にあった。

示された提案は、1998年の『世界建築博覧会：奈良・TOTO トリエンナーレ』展(黒川紀章大会長)の設計競技(藤森信昭審査委員長)で2席の高い評価を受けた。「鶴翔校舎」の再生保存意識の在り方を地域の建築関係者たちの行動に一石を投じることになった。

Ⅶ. 終わりに

7-1. まとめ

2000年に解体された北海道・道東に位置する小さな地域集落の阿寒小学校「鶴翔校舎」(1965年)は、学校施設として以上の役割を担い地域に貢献した。設計者田上自身の建築創造においても地方から建築界への発信を試みるかのような卓越したメタファー的な昇華をもって近代建築にし、埋もれた建築の存在意義は計り知れない遺産だったと言える。名もない一地域の小さな集落の学校建設の起因は、①町の体制(町制施行)に合わせた教育委員会の次代への理想としての崇高な理念の気運に支えられたこと。②北海道教育委員長・木呂子氏より建築家・田上氏の紹介を受けたこと。③彼によって設計姿勢への影響の要素として「マリモ校舎」においてJ. バチエラ神父との出会い(アイヌ集落地域と自然信仰思想を内在させる)。そして、④F.L. ライトとの出会い(プロフェッションを学ぶと共に「有機的建築」を試みた)。結果として、⑤「マリモ校舎」から「鶴翔校舎」へと建築造形の「有機的建築」が具現化した。この意義、道東地域との関わりと田上の年譜を明らかにできた。

更に、整備された「まりも国道」がつなぐ街の動脈としての始終地点に位置した田上の学校建築。将来に向けた校舎の記憶を大切にするという考えを核とした空間活用の在り方の可能性を秘めた校舎の記憶を頂点とし、延長させ四角形の回廊が林や周辺を回遊できる拠点であると考えられる将来の可能性の提案が、地域創成継続性の展望を指し示し、再活用を意識したサステイナブル(持続可能)な地域の在り方に言及できた。

様々な地域で培われた地域性が安易に失われることのないようにこの論考を通して切に願わずにはいられない。

7-2. 謝辞

フィールド調査において、当時の阿寒町(現釧路市)

佐々木町長・高橋教育長・町役場関係者・阿寒小学校長だった田中繁夫氏、マリモ幼稚園建設の元現場監督 森下氏及び湖畔在住の現場担当の方々には、資料提供や貴重なお話を戴き感謝致したい。残念ながら釧路村井建設では当時の施工図面資料等は見つからなかったものの協力戴いたこと感謝致したい。また、資料収集には月岡光代女史、末岡紀子女史に協力戴くとともに、高島のり女史に翻訳の協力を戴いたこと感謝申し上げる。

7-3. 注釈

- *註1) J. Batchelor: J. バチェラー神父で統一した。
- *註2) 鶴翔校舎: 阿寒小学校校舎を「マリモ校舎」に対応させて筆者が名付ける (1998)。
- *註3) F.L. ライト: 自然・生命の造形の中に自らの建築を” Organic Architecture” (有機的建築) と呼んだ。
- *註4) 「世界建築博覧会・奈良/TOTO トリエンナーレ 1998」展設計競技: 藤森信昭審査委員長で木下が2席賞受賞。
- *註5) 前田一步園: 前田正名が湖畔の1906年山林の払い下げを受け、阿寒湖畔の開発に貢献。
- *註6) チャシ: アイヌ民族の砦と考えられているまた、信仰の聖地遺構とも考えられている。

7-4. 図版等出典 (「*」表記のみ筆者撮影資料)

- Fig. 1) 田上義也/30代; 『F.L. ライトの子弟たち』1995.
- Fig. 2) F.L. Wright; 『フランク・ロイド・ライトと日本展』, 1997.
- Fig. 3) J. バチェラー; 『異境の使徒/英人ジョン・バチラー伝』1991.
- Fig. 4) 阿寒小学校/鶴翔校舎; 『八十年の譜』1980
- Fig. 5) *阿寒湖畔小学校/マリモ校舎 (筆者撮影); 1985.
- Fig. 6) 鶴翔校舎とマリモ国道; 『八十年の譜』1980
- Fig. 7) 阿寒小学校校舎; 当時校長田中敏繁 (提供) 1965.
- Fig. 8) 阿寒小学校平面; 『田上義也建築作品抄』1996.
- Fig. 9) *階段室空間; 採光ブロック・手摺 (筆者撮影), 1998.
- Fig. 10) *北側構成空間; 体育館・増築梁 (筆者撮影), 1998.
- Fig. 11) バチェラー学園平面図; 『田上建築画集 6.』1987.
- Fig. 12) 森の中の校舎; 『広報あかん・ふるさと版』1997.
- Fig. 13) 1階平面図; 『阿寒村立小学校新築設計図』1956.
- Fig. 14) 東側立面図; 『阿寒村立小学校新築設計図』

1956.

Fig. 15) *『奈良・TOTO トリエンナーレ展』 (筆者撮影) 1998.

表-1) 「田上義也年譜」出典; 『北のまれびと』 (下巻), 現代出版, 1977. / 『F.L. ライトの子弟たち』ギャラリー・タイセイ発行, 1995. / 『建築家・田上義也の戦後の活動』, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No72, 1999. より選択整理加筆。

別表-1) 「田上義也の戦後の道東建築年表」出典; 『北のまれびと』 (下巻), 現代出版, 1977. / 『F.L. ライトの子弟たち』ギャラリー・タイセイ発行, 1995. / 『建築家・田上義也の戦後の活動』, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No72, 1999. より選択整理加筆。

7-5. 参考・文献

- 1) 『阿寒村立小学校新築設計図』A2, 田上建製作事務所, 阿寒町教育委員会所蔵, 1956.
- 2) 『阿寒小学校新築設計図書』Tanouye arch' Office, 阿寒町立阿寒小学校所蔵, 1964.
- 3) 『阿寒町史』町史編纂委員会, 阿寒町役場, 1966.
- 4) 『私たちの学校』開校70周年記念誌, 阿寒小学校, 富田国俊編集代表1970.
- 5) 『開校50周年誌』阿寒町立阿寒湖小学校, 1973
- 6) 『北のまれびと』<エゾライト田上義也> (下巻), 小山一男著, 現代出版, 1977.
- 7) 『八十年の譜』阿寒小学校開校八周年記念誌, 開校八十周年記念祝賀協賛会記念誌部編集, 阿寒小学校発行, 1980.
- 8) 『阿寒町百年史』町史編纂委員会, 阿寒町役場, 1986.
- 9) 『田上建築画集6.』田上義也建築画集, Editions Kensetsusha, Tokio, 1931. / (復刻版), ライフ出版, 1987.
- 10) 『イタク カムイ・山本多助』山本多助著, 北海道大学図書刊行会, 1991.
- 11) 『永久保秀二郎の研究』中村一枝著, 釧路叢書第28巻・釧路市, 1991.
- 12) 『異境の使徒/英人ジョン・バチラー伝』仁多見著, 道新選書21, 1991.
- 13) 『ジョン・バチラー自叙伝/我が記憶をたどりて』伝記叢書183, ジョン・バチラー著, 大空社, 1995.
- 14) 『空間のリサイクル・1994年度日本建築学会全国設計競技優秀作品集』1等+島本賞受賞: 木下泰男, 日本建築学会, 1995.
- 15) 『F.L. ライトの子弟たち』ギャラリー・タイセイ編集, ギャラリー・タイセイ発行, 1995.
- 17) 『田上義也建築作品抄』北方文化研究会編, らいらく書房, 1996.
- 18) 『広報あかん・ふるさと版』阿寒町役場企画財政課

編集・発行, 1997.

- 19) 『フランク・ロイド・ライトと日本展』シーボルト・
カウンスル財団, 1997.
- 20) 『世界建築博覧会：奈良／TOTO トリエンナーレ』
作品資料, 2 席受賞：木下泰男, 1998.
- 21) 『建築家・田上義也の戦後の活動』石井・越野・角,
日本建築学会北海道支部研究報告集 No72, 1999.
- 22) 『北海道・阿寒に於るマリモ校舎；田上建築』木下
泰男, Vol. 1. No. 1, 地域創成学会, 2009.

別表 - 1. 田上義也の戦後の道東建築作品年表

<1945-1991>

年号(元号)	年齢(歳)	建築作品(；但し道東とは十勝・釧路・根室・網走支庁を指している。)	活動/備考
1945(S20)	46		田上:1899(M32)5/5年栃木県生れ
1948(S23)	49		パチェラー:1944年4/2故郷で享年91歳逝去
1951(S26)	52		田上建築製作事務所再開
1952(S27)	53		
1953(S28)	54		
1954(S29)	55		二風谷小中学校校舎(日高)
1955(S30)	56	阿寒湖畔小学校:マリモ校舎(阿寒)	
1956(S31)	57		木呂子邸(札幌)
1957(S32)	58		北海道建築士会理事就任
1958(S33)	59		
1959(S34)	60	遠軽家庭学校(遠軽)	F.L.ライト:4月9日(享年92歳)逝去
1960(S35)	61		
1961(S36)	62	玉川ユースホテル(網走)・網走博物館増築(網走)	北海道の建築(朝日新聞)54回連載
1962(S37)	63	道銀網走支店(網走)・阿寒公民館(阿寒)	
1963(S38)	64	道銀滝ノ上支店(滝ノ上)・遠軽家庭学校共同宿舎(遠軽)	「雪と炎フロンティアの道」講演・北海道総合開発功労者知事賞受賞
1964(S39)	65	出塚商店(紋別)	『田上義也建築作品抄』(住宅編)
1965(S40)	66	サロマユースホテル(佐呂間)・美幌ユースホテル(美幌)・網走オホーツク水族館(網走)・阿寒小学校校舎:鶴翔校舎(阿寒)	論文『北海道のビルディングその北方的個性』・北海道文化賞受賞
1966(S41)	67	阿寒町福祉センター(阿寒)・網走郵便局舎(網走)	『田上義也建築作品抄』(公共編)・日本学士会アカデミア賞受賞
1967(S42)	68	藤本長蔵邸(帯広)・帯広市立図書館(帯広)・標津町福祉センター(標津)	「生き続ける帝国ホテル」新建築寄稿
1968(S43)	69	阿寒観光会館(阿寒)・華の湯ホテル(弟子屈)	
1969(S44)	70	標津ユースホテル(標津)・道銀斜里支店(斜里)・道銀中標津支店(中標津)・標津小学校(標津)	『地方性と公共建築』エッセイ
1970(S45)	71	道銀和琴保養所(川湯)・町立阿寒中学校(阿寒)	「北の文化と脈」講演
1971(S46)	72	日本ユース小清水中山記念館(小清水)・標津小学校体育館改築(標津)・	「北方圏のユースホテル研究と作品」講演・勲4等瑞宝章受章
1972(S47)	73	標津川北小学校(標津)・標津川北保育園(標津)・摩周湖ユースホテル(弟子屈)	「海外ネットワーク;デンマーク紀行」発表
1973(S48)	74	標津町体育館(標津)	「北のユートピア論」講演・「地域性と建築家の役割」講演
1974(S49)	75	ルベシベユースホテル(留辺蘂)・美幌ユースホテル(美幌)・津別町幼稚園(津別)	
1975(S50)	76		
1976(S51)	77	サロマ湖ユースホテル計画(佐呂間)・道銀帯広西支店増築(帯広)	
1977(S52)	78		
1978(S53)	79	サロマ湖ユースホテル(佐呂間)	日本基督教会北1条教会(札幌)・札幌市芸術文化功労賞受賞
1979(S54)	80	津別町川北幼稚園(津別)	北海道開発功労賞受賞
1980(S55)	81		
1981(S56)	82	津別町開拓村(津別)	
1982(S57)	83		
1983(S58)	84	道銀足寄支店長住宅(足寄)・道銀斜里支店長住宅(斜里)	北海道新聞社会文化賞受賞
1984(S59)	85		
1985(S60)	86	網走市立博物館改築(網走)	
1986(S61)	87		
1987(S62)	88	標津高校改築(標津)	「北のアルヒテクト:田上義也初期住宅作品」展／「田上義也ドローイング」展
1988(S63)	89		
1989(H1)	90	オホーツク流水科学センター(紋別)	
1990(H2)	91		
1991(H3)	92		田上:8/17札幌にて逝去(享年92歳)

建築家；田上義也／1899-1991に関する建築調査研究（Ⅰ）－北海道・阿寒における阿寒小等学校校舎・鶴翔校舎；田上建築－

Yoshiya Tanouye's architectural creation of region(Ⅰ) -The Akan junior school Architecture in Akan, Hokkaido/Tanouye's Architecture-

Yasuo Kinosita (Hokusho University ; Part-time Lecturer)

Abstract

This discussion shows the results of a study on the regional architectural creativity of Tanouye's architecture, highlighting an elementary school building of 1965-Tanouye's architecture, which is constructed in the Akan in eastern Hokkaido. It has been torn down in 2000 upon dilapidation. However, focusing on the architect Tanouye Yoshiya's architectural formative creation, and listing his brief profile along with the mentoring relationship of the American architecture F. L. Wright and the architectural works, it discusses the concept and the significance of the symbolic creation of the architectural works rooted in the local community.

Key words : Akan "Kakusho" junior school, Frank Lloyd L.Wright, Ezo-Wright,
Yoshiya Tanouye, Akan kohan "Marimo" junior school.